

聖書：Ⅱサムエル 11：1～27

説教題：ダビデの姦淫の罪

日時：2018年6月24日（夕拝）

サムエル記第二 11 章。全聖書の中でも最もショッキングな章の一つです。神の御心にかなう王として立てられたダビデが口に出すのも恥ずかしい罪を犯します。他人の妻を自分のものとする姦淫の罪を犯し、さらに邪魔になったその夫を殺す殺人の罪を犯します。人間的に考えるなら、このような記録は宗教の正典に載せない方が良いのではないのでしょうか。かえって読む者のつまずきとなり、キリスト教宣教において不利なことになるのではないのでしょうか。しかし聖書のすごいところは信仰者たちの罪の現実をありのままに記していることです。むしろそこに罪という人間最大の問題から目をそむけず、これを真正面から取り上げる聖書の姿勢があります。

まずこの時のダビデはどんな状況にあったでしょう。1 節からこの時はアンモン人との戦いの時であったことが分かります。ダビデはヨアブと自分の家来たちとイスラエル全軍を送り出していました。そして彼自身はエルサレムにとどまっていた。ある人はダビデがこのようにエルサレムにとどまっていたことが問題の始まりだと言います。しかし前の 10 章 7 節にあったように、王は必ずすべての戦いに出て行かなくてはならないということはありません。これはこの時の戦いが、ダビデが行かなくても十分なものであったことを示唆しています。つまり余裕ある状況だったのです。そんなある日、ダビデは夕暮れ時に床から起き上がります。ある人はこれを見て、やはりダビデは問題だと言いますが、聖書の世界で適切な昼寝は非難されていません。午後に休むのは普通のことでした。これは先の 1 節と合わせて、ダビデが置かれていた余裕ある状況を示しています。これが今日の事件の背景です。さてそんなダビデは屋上を歩いていた時、一人の女が体を洗っているのが見えました。その女は非常に美しかったとあります。私たちはここでもまだダビデを責めることはできません。彼は見ようと思って見たのではなく、たまたまそれが視界に入って来ただけなのです。問題はその後です。ダビデは人をやってその女について調べさせます。なぜその必要があるのでしょうか。それはダビデが彼女に特別な関心を持ったからに他なりません。彼女に対して情欲の心を抱いたからです。私はこの箇所を読むと、神学生時代にチャペルで聞いたある先生の説教を思い起こします。その先生はダビデがここで「2 度見たこと」が問題だと言いました。1

回目に彼女を見たことは仕方がない。それは防ぐことはできなかった。しかし彼は2度見た。一瞥が凝視に変わった。そうして彼は進んではならない道に進んだと。なぜこれまでひたすら神の御言葉に従って来たダビデが、このことを自分に許したのでしょうか。それはこの時の彼が繁栄と安泰の中にあっただけで無関係ではなかったと思われる。苦しい時、困難のただ中では必死に神により頼み、謙遜に、また懸命に神の言葉に従ったダビデでしたが、今やイスラエル王国の基礎は固まり、周りの国々にも次々に勝利し、アンモン人との戦いにも出向かなくて良い状況がありました。そんな成功に次ぐ成功の中でダビデの心に隙ができていた。神の御言葉にこそ従わねば！という真剣さが消えていた。それに代わっていつしか、今の自分は少々好きなように生きて大丈夫だろう、それで今の祝福の状態がぐらつくことはないだろうという慢心、あるいは気の緩みが生じていたのでしょう。

この最初の小さな戦いで悪に心を許した結果、ダビデは暴走します。彼は彼女について調べさせ、その結果、ウリヤという兵士の妻であることが判明します。少なくともここでブレーキがかかるべきでした。どうして他人の妻を欲望の対象にして良いのでしょうか。しかし一旦崩れた堤防は抑えが効きません。ダビデは王の権力を乱用して彼女を召し入れ、ついには床を共にします。彼は「姦淫してはならない」という十戒の第7戒を良く知っていたでしょう。また夫ウリヤが戦場で働いている陰でこんなことをするのは部下への甚だしい裏切り行為であることも分かっていたでしょう。しかしダビデは王の立場にある者として、自分のしたいことは何でもすることができます。その特権を用いて、彼はとにかく自分がしたいと思ったことをしたのです。直前の9章と10章では、ヨナタンに対し、また異邦人の王に対し、真実を尽くした素晴らしい王の姿がありましたが、この11章ではそれとは丸つきり反対に、真実な関係を破壊する行為に出た恐ろしい王の姿を私たちは見るのです。

事はこれで済みません。ダビデはある日、「私は子を宿しました！」というバテ・シェバからの知らせを聞きます。さて彼はどうしたでしょう。この日まではしばらく時間が経っていましたが、彼は犯した自分の罪を悔い改めることも可能でした。しかし彼が取ったのは自分の罪を隠蔽する道でした。ダビデはウリヤを家に帰らせ、バテ・シェバの胎に宿った子はウリヤによるものだと思わせようとします。彼はウリヤを呼び寄せ、「ヨアブは無事か、兵士たちも変わりはないか、戦いもうまく行っているか。」と尋ね

ます。本来これはもっと責任ある立場の人に聞くべき言葉のように思います。不自然な会話です。そして「家に帰って、足を洗いなさい」と言って、彼の後から贈り物が付いて行きます。これも不自然です。なぜ王は私にこんなに良くするのか。やましい心がある人はこのようなことをするものです。ですから私たちも、普段そうでない人がいつになく親切で、愛想良く接して来たら、何か悪いことを隠しているのではないかと思わなくてはなりません。ところが事はダビデが願った通りに進みません。ウリヤは何と家に帰らなかつたのです。なぜあなたは帰らなかつたのかとダビデが問うと、ウリヤは11節のように答えます。「神の箱も、イスラエルも、ユダも仮庵に住み、私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私が家に帰り、食べたりに飲んだりして、妻と寝るといことができるのでしょうか。あなたの前に、あなたのたましいの前に誓います。私は決してそのようなことをいたしません。」そこでダビデは「もう一晩泊まって行きなさい」と言って、その晩の夕食会に招きます。そしてご馳走を食べさせ、酒で酔わせれば、彼の固い決心も弱まり、ついには家に帰って妻と寝るのではないかと期待した。ところがウリヤはここまでしても家に帰らない。何という忌々しい高潔な人間であるか！

この結果、ダビデは心を決めます。もはやウリヤを殺す以外に、自分の罪を隠す方法はないと。彼はヨアブに手紙を書き、ウリヤを激戦の真っ正面に出し、彼が討たれて死ぬようにせよ！と指令を出します。そして17節にあるようにウリヤは戦死します。ダビデはこうして自分が除き去りたい相手を、自分の手を汚さず、他人の手で殺しました。しかも戦争でやむなくそうなったと思わせる仕方でこれをした。後に報告を受けた時、ダビデは25節で「このことに心を痛めるな。剣はこちらの者も、あちらの者も食い尽くすものだ。」と、いかにも懐が広く、物分りの良い指揮官を演じています。そして27節ではバテ・シェバを自分の妻として迎えます。何事もなかったかのように月日は過ぎ去ります。ダビデは自分の権力を使って、自分のしたい通りのことをすべてなし遂げたのです。

しかしこの章の最後に短くも恐ろしい御言葉が記されています。27節後半：「しかし、ダビデが行ったことは主のみこころを損なつた。」注目に値することは、この章で「主」が出て来るのは、ここが最初であるということです。ここまでひたすら動いていたのはダビデでした。彼がしたいことをし、またその罪を隠蔽するためにあれこれ行動して来

ました。しかしこの一番最後の部分で「主はすべてを見ていた」と語られています。原文では「主の目に悪かった」という表現です。このことは私たちに何を教えているのでしょうか。それは主は黙っておられて、まるでそこにおられないかのように私たちに感じられる時がありますが、実際はそうではないということです。私たちも今日の章のダビデのように、何か悪を行っても、主がすぐに介入されないことがあります。むしろかえってそのことでうまく行く場合がある。誰にも気がつかれていないし、神にもそのことで特段咎められたり、罰されたりしていない。すると私たちは思うのです。神もこのことを知らないのではないか。あるいは知っていたとしても、このような小さなことはいちいち咎められないのではないか。だからこれくらいのことをして生きても問題ないのではないか。しかしそうではないのです。この章ですっと出て来なかった主が、最後にしっかり出て来ています。すなわち主はこの 11 章の間、ずっとそこにいて、すべてを見ていた！そしてそれは「主の目に悪であった」と言われています。ですからこのままでは済まされません。主がこのダビデの罪を取り扱って行かれる様子が次の 12 章以降に記されることとなります。

以上の 11 章から私たちは何を学んだら良いのでしょうか。2つのことを申し上げて終わりたいと思います。一つは私たちは今日の記事をどのように読むべきかということです。この記事はダビデを非難するためにあるのでしょうか。ダビデは理想的な王にも見えたが、私たちと同じ一人の人間に過ぎないと彼をこき下ろすためにあるのでしょうか。ある人は、このダビデの事件を指しながら、聖書の中で特に受け入れられない人物の一人として彼の名をよくあげていました。その人は女性であったことと関係するかもしれません。確かにここでダビデがしたことは厳しく責められるべきことでしょう。しかしこの章は単にダビデ個人を非難するためより、私たち人間の罪の性質を示すために書かれたと見るべきではないでしょうか。私たちが考慮すべきは、ダビデはこれまで見て来た通り、類稀なる信仰者であるということです。サウルからひどい扱いを受けても仕返しせず、忍耐して神の時を待ち、数々の苦しみを信仰によって耐え抜いて来た人です。私たちよりもはるかに先を進んでいる人です。ところがそのダビデであっても安楽の中でいつしか高ぶり、気を緩めた時に、あっという間に信じられない罪の中に転がり落ちた。とするならいかに私たちはもっと容易にそうなりやすいか！と自らを警戒してこそ本当でしょう。いや私たちはすでに彼と同じように幾多の失敗をしている者ではないでしょうか。それはダビデと同じ姦淫や殺人の罪ではないかもしれませんが。しかし私たちも

ある時は信仰的に立派に歩んでいるようでも、ちょっとした気の緩みからとんでもない罪の生活に陥った経験があるのではないのでしょうか。人に知られたくない、口に出すのも恥ずかしい罪を犯してしまったことがあるのではないのでしょうか。私たちはこの記事を読んで、そのような自分自身の姿こそを反省し、主の導きを求めるように促されるべきではないのでしょうか。

そしてもう一つは、主はすべてを見ておられることを改めて心に刻むことです。私たちの生活は人間の目には一見うまく行っているかもしれませんが。問題は何もありません。誰からも咎められていない。しかしだからそれで大丈夫ということにはなりません。主は黙っておられるかのようにして一切を見ておられます。その主の目の前で私たちの歩みは大丈夫でしょうか。もしその主の目の前で、主の目に正しくない何かがあることを思うなら、私たちのすべきことは、それを主の前に告白し、悔い改めへと進むことでしょう。主は御前になされた悪をそのまま見過ごされません。ダビデも次の章でそうするように導かれます。もちろん悔い改めれば何事もなかったのように以前の祝福が戻って来るということではありません。犯した罪の刈り取りはあります。これ以降のダビデの生活は、困難と悩みに満ちたものとなります。そういう意味で罪の代償は大きいことも私たちは学びます。しかしだからと言って、その者にもう望みはないかと言うと、そうではない。悔い改める者には大きなあわれみが与えられることを私たちは見ます。その者に懲らしめが与えられ、主の訓練が与えられますが、それにまさる罪の赦しがあり、主の恵みがあり、救いがあります。今夕はこのすべてをご覧になっている主の前で、私たちはダビデの記事を通して、自分自身とその歩みを省みたいと思います。そして時を逸することがないように、遅過ぎたという日が来ない内に、主の前での告白と悔い改めの生活へと進みたい。そうする者に主が与えてくださるあわれみを次の 12 章から学んで、ダビデと同じように私たちをも導いてくださる主の恵みの道を、私たちも進みたいと思います。